清風会・新興会・緑風会 合同研修視察報告

清風会、新興会、緑風会、無会派の合計14名は、さる2月7～8日の2日間、宮城県加美町と大崎市において視察研修を行った。

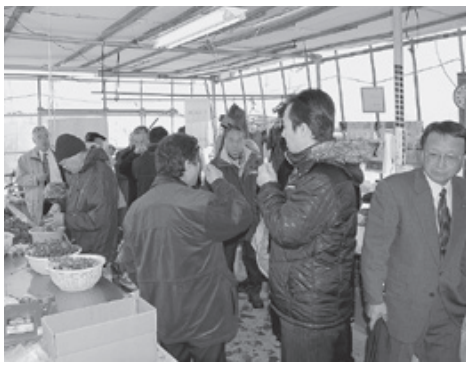
加美よつば農業協同組合では、管内75集落のうち69集落で営農組織が設立され、組織率が県内№1である。その理由として、行政・JA・関係団体によるワンストップフロア化の担い手センターが設立され、集落営農に取り組む場合にネックとなる経理部門を一元センターとして運営し、組織の負担の軽減を図り、組織化に大きく寄与したものと思われる。その他、震災からの教訓や、目指すべき方向性をしっかりと捉え、参考とすべき点も多かった。

薬莱わさび栽培園は、宮城県内建設業5指に入る奥田建設㈱が新分野参入モデル事業、農商工連携支援事業を取り入れ、地元農家と連携し、平成17年12月に開園。当初の作付面積は20アールだったが、以後、順次作付面積を拡大し、現在は約1ヘクタール。付近一帯は、セキスイハウスが開発したリゾート地帯で、仙台から1時間余の距離にあり、年間百万人の観光客が訪れるという恵まれた地域。

当初は販売に苦労したが、奥田建設というブランドと長年の「人脈と信用力」により、仙台市内の飲食店をはじめとして順調に販路を開拓している。当市の畳石方式の栽培とは異なるが、根わさびに加え、加工品や食事のメニューにも工夫を凝らしていると感じられた。

今回の視察が縁で、当市の宮守町湧水地区のわさび生産のほ場見学が実現する運びとなったことも、成果の一端と思われる。

特定非営利活動法人鳴子の米プロジェクトの発足は、国の農業政策の大転換である「品目横断的経営安定対策」によって、消失しかねない鳴子地区の米作及び農業を守る目的からであった。総合プロデューサーに結城登美雄氏を迎え、指導を仰いだことや、山間地向け品種「東北181号」との運命的出会い、適地適作「地域の米」としてバインダー刈取り、すべて自然乾燥による「杭掛け」による、他との差別化など。近年では、試食会や勉強会などで普及に力を入れている。発想や危機をチャンスに変え、人脈やメディアを上手に利用しながら、可能性があることを実証していると感心させられた。



遠野一新会 研修視察報告

遠野一新会と無会派1名の合計4名は、さる2月14～15日の2日間、宮城県において研修視察を行った。

登米市の農業法人伊豆沼農産では、人と自然へのやさしさを求めて「農業を食業に変える」を基本コンセプトに、ハム、ソーセージの加工と、その加工品を提供する食堂や農家直売所があり、総合的に地域と関わる「農工商」の一貫体制を構築することができた。

㈲サンフレッシュ松島では、こだわりのトマト作り、オランダの温室野菜栽培技術を活用した太陽光を最大限ハウス内に確保するため、光の透温率が高い「全面ガラス温室」を使用し、かつ、温室内の「陰」となる面積が最小となるよう温室の骨格材はかなり細いものを使用している。また、「二酸化炭素」については、トマトが活発に生育できるような濃度になるよう、コンピューターにより常時自動調整をしている。

デリシャスファーム㈱代表取締役の今野文隆氏は、トマトを育てること30年以上。デリシャストマトを始めたきっかけは、トマトは栽培時に水分を減らすと甘みが増すことが分かったからだ。生産農家として美味しいトマトを作るだけではなく、商品として販売できる量を育てなければならない。とてもデリケートな品種で、おいしさの追求と収量のバランスを得るために、試行錯誤の連続。形も不揃いになりやすく、多くの農家が挑戦しては数年で断念。種子メーカーも積極的に薦めない。それほどこのトマトの栽培は難しかったという。「色々と工夫は必要だが、ここの土はトマト栽培に向いているし、冬の昼夜の寒暖の差など気候条件もいい。」とのことだった。

ここまでこられたのは、同様にトマトづくりに取り組んだ6軒の地元農家がいたからだという。現在も月に一度は定期的な情報交換を行い、お互いのレベルアップを図っている。現在は、加工品にも取り組み、農家カフェと直売所も経営し、地元雇用に貢献している。

農業への情熱を絶やすことなく工夫を続け、様々なことに挑戦し続ける姿に触れ、感動しながら研修地を後にした。